

台湾高座会、

この心やさしき人々

石川

公弘

● 本会理事
石川台湾問題研究所代表



石川公弘・神奈川李
登輝友の会支部長

北に^む対き年の初めの祈りなり

心の祖国に栄えあれかし

阿川弘之前会長によって見出され、一躍有名になった台湾少年工出身歌人・洪坤山氏の歌碑除幕式が、去る四月二日、洪夫人と二人のご子息を招いて山口県の米泉湖畔^{べいせんこ}で行われた。この歌に感動し、自ら曲をつけた下関の作曲家・加藤さとる氏の尽力によるものである。

その歌碑は、『台湾万葉集』の編著者であり、師でもある呉建堂氏の歌碑と並んで建てられていた。義兄弟である台湾の蔡焜燦氏から「坤山よ、あなたは幸せ者だ。台湾人として、兄貴として、涙が出るほどうれしい」との祝辞が、北村友雄・台北稲門会長から披露された。また、台湾国際放送の三宅教子さんが吟ずる「心の祖国」や、歌手である加藤夫人の歌う「桜前線」

が周囲の山々にこだまし、湖面を渡って行く。久しぶりに、心洗われるひとときだった。

その後、吉田聖・山口県日台文化経済交流会会長はじめ幹部の方が、茶会を開いて私たちを歓待してくれた。山口県は、児玉源太郎・第四代台湾総督の出身地で、多くの人が台湾に深い愛情を抱いている有縁の地である。

そして、この場での何輝洲・高座会関西支部長の挨拶が、私の永年の疑問を解いてくれた。「私は台湾少年工の一期生として日本へ来た。八十歳になるのも近いが、本日まで生きてこられたのは、生産現場の上司が私たちの命を大事にしてくれたからだと思う。飛行機を製造する我々は、常に危険と隣り合わせだった。私の配属された大村の二十一空廠、名古屋の三菱航空機製作所、厚木基地、どこも厳しい敵機の標的

だった。上司は『敵機に狙われたら防空壕など役に立たない。少年工は、できるだけ遠くへ逃げなさい』と常に言ってくれた」

初めて聞く話であった。私はかねがね、危険な戦場にいた台湾少年工八千四百人の大集団にしては、一％に満たない六十人の戦死者は、亡くなった方々には申し訳ないが、いささか少ないのではないかと感じていた。そこに、台湾少年工を案ずる上司がいたと聞いて謎が解け、少しほっとした。また、それを今も評価している元少年工がいることも、日本人としてうれしかった。

昨年十一月、台湾高座会は、帰国六十周年記念大会を台北郊外の陽明山にある中山楼で開催した。その記念誌に、簡士性・桃園区会会長の次のような文章がある。

「高座海軍工廠では、技術だけでなく、人間としての道も教わった。日本精神もみっちり仕込まれた。高座特有の『三宝』、高座の心、高座の情、高座の魂を教え込まれた。『小にして学べば、壮にして為すことあり』と恩師が教えて

くれ、これが私の人生の大きな支えとなった。

開南商工業学校高等部三年のときだった。一九五〇年十二月一日午前三時、私は国民党の特務に逮捕され、今の緑島に十三年六ヶ月拘留された。深夜の拷問、いま思っただけでも身震いする。それは精神と肉体への筆舌に尽くせない凌辱だった。耐えに耐えていた私は、あるきつかけから、一つの力を悟った。高座の三宝精神である。それは心の底から湧き上がってきて、私の失いかけた精神を蘇らせてくれた。私が、再び青空を見ることが出来たのは、三宝精神のお蔭である」

燃えるような向学心を抱いて日本本土へやって来たのに、学ぶ環境はなく、その職場は危険に満ちていた。「私たちは騙された」と言われても、仕方のない状態だった。それなのに、台湾高座会の人たちは、これほどまでに、心優しい。その彼らが、いま共通に抱いている『台湾』という国創りの夢、私たち日本人は、台湾人のもつこの夢の実現のために、何かをしなければならぬ。